

# 本庁舎の概要

本庁舎は昭和13年に建設されて以来、川崎市を代表する庁舎として親しまれてきました。

このシンプルでモダンなデザインの本庁舎は、当時の市役所長であった元田稔氏によって設計されました。

本庁舎はこの78年間、時代の流れとともに姿を変え、川崎の街を見守ってきました。

戦時中には、時計塔は迷彩色に塗られ防空監視塔として利用されましたが、空襲で周囲が焼け野原となる中焼失を免れ、人々の復興の希望として市民を支えました。

戦後は、街の発展と人口増加などから、本庁舎は増築・改築を加え現在に至っています。

そしてこのたび耐震性能の不足などから、惜しまれつつも建て替えられることとなりました。

## 概要

- 鉄筋コンクリート造(一部鉄骨鉄筋コンクリート造)
- 昭和13年(1938)竣工。3階建、地下1階、時計塔は地上約36m
- 昭和25年(1950)に東館を2階から3階に増築し、その9年後の昭和34年(1959)には、本館を3階から4階に増築し、併せて北館を増築している。また昭和40年代以降に、窓をスチールサッシからアルミサッシに交換し、昭和50年代後半にはタイルも全面交換している。

## 建設の経緯

関東大震災から昭和初期の市役所は、元川崎尋常高等小学校校舎の古材を利用して建築されたと考えられます。昭和になり合併が進み、工業港湾都市として発展した川崎は人口も増加、それまでの市役所は狭くなり「不朽は危機を感じるまでの状態」だったようです。本庁舎の建設は、昭和9年(1934)に改築予算案が市議会で可決されました。昭和10年(1935)に設計が完了し、昭和11年(1936)に着工され、そして昭和13年(1938)に竣工となりました。

## 設計者 元田稔氏



明治34年(1901)、東京都生まれ。

父は、日本聖公会東京教区初代監督(主教)になった元田作之進氏。その影響で20歳の頃に洗礼を受けています。教会建築で有名な建築家です。

元田稔氏は、大正11年(1922)に旧東京帝国大学工学部建築学科に入学し、当時の日本の近代建築初期を担った伊東忠太、佐野利器等の教師陣に学びました。卒業後は、東京市技手、川崎市技術建築課長(初代)、海軍技術少佐等を経て、昭和25年(1950)元田建築設計事務所を開設。多くの作品を手掛けました。



本庁舎新築当時の完成予想バース

### ■元田稔氏が川崎市役所の設計を行うに当たり 影響を受けたと思われる建築



ストックホルム市庁舎



ヒルベルスム市庁舎

### ■元田稔氏の作品



高井戸教会

横浜聖アンドレ教会

# 創建当時の技術とかかわった人

## 現在も残る創建当時の技術

### 木目塗り(市長室)



残存が確認された創建当時の金属製の道具のうち、市長室に設置されている扉には「木目塗り」が施されています。木目塗りとは、木目調に塗装する方法で木材やモルタル面を木材に見せかけるために用いていました。昔は寺院や洋風建築に多様に使われていたようですが、戦後になると次第に見られなくなった技術です。



(写真: © 山岸 剛氏)

講堂で見られるプロセニアム(舞台を額縁のように囲む建物)は黒色大理石で当時のまま残されています。またその内側にある付け柱も当時のまま残されています。



木目塗の扉

木目をつける道具の一部

### スチールサッシ(入札室)



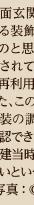
本館・東館のスチールサッシは、そのほとんどが昭和41年頃にアルミサッシに交換されましたが、唯一入札室に当時のままのスチールサッシが残っていました。



正面玄関脇の壁は、当時のままの琉球トラバーチン(琉球石灰岩)です。これは大正末期から昭和初期にかけて建材として開発がすすめられたもので、国會議事堂や百货店など、華麗さを求める内装に用いられました。琉球トラバーチンは、一般的なトラバーチンより固く、床材として使われるようになりました。



正面玄関の扉に取り付けられている装飾レリーフは創建当初のものと思われます。扉本体は改修されているため、レリーフだけを再利用したと推測されます。また、この正面玄関の建具枠も漆装の調査で、漆装の最下層で確認できた金属素材の状況から、創建当時の材料である可能性が高いということが分かりました。



琉球トラバーチンが残る壁

（写真: © 山岸 剛氏）

## 建設にかかわった人(塔屋)

本庁舎竣工時に配布されたであろう「竣工記念誌」には、市長を始め建設当時の市の役職者、市会議員、職員の名前が記されています。その中には関係者および設計監理者として「臨時建築課長 元田稔」の名前も見えます。

その他、この記念誌には工事事業者や材料納入業者までが列記されています。

工事を請け負ったのは、株式会社直喜鉄工所。その他石材、砂利、左官などの職人の名前までも入っています。



# 正面玄関

今と昔

市役所の顔である正面玄関は、他の諸室に比べて創建時のものが多く残されている場所です。また改修されたものでも形や装飾など見た目の印象が変わらないように工夫されています。

正面玄關內部

玄関の3連扉の左側の扉は現在物置となっている場所ですが、創建時は下足室がありました。今のように周辺の道路が舗装される以前は、公共建物や集客施設では、靴を履きかえる下足室や下足預所がありました。

玄関室は、受付とスロープ・手すりを設置し現代の生活環境に適応するよう改修し、少し様相を変えていますが、壁の琉球トラバーチン、床の万成石は創建時のものです。



正面玄關外側

昭和13年(1938)の創建時には、車寄せの柱仕上げは黒御影によるものでした。その後、柱仕上げは改修されて、現在の鋼板貼りに改修されています。



## 車寄せ柱の変遷

車寄せの柱の仕上げは時代によって更新されてきました。

竣工時の昭和13年(1938)は黒御影石で仕上げられていました。

昭和35年の写真を見ると、車寄せの柱仕上げがタイルに改修されていることが分かります。さらに、現在は鋼板貼り仕上げに改修されています。



昭和13年(1938) 落成直前の写真  
黒御影石仕上げの柱が黒く光っている感じが分かります。

現在の写真



[部分拡大]  
タイルの目地が写っています



[部分拡大]  
現在は鋼板貼り仕上げです。

写真：◎山岸猛

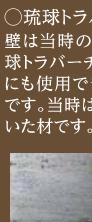
※ ココが見どころ



○元下足室  
当初は扉は無く下足箱への入口でした。当時の写真をよく見ると下足箱があるのが分かります。



写真：◎山岸剛



○琉球トラバーチン  
壁は当時の仕上げ材、琉球トラバーチンです。床材にも使用できる固い材質です。当時は良く使われていた材です。



○扉レリーフ  
創建時のレリーフを再利用していると思われます。  
昔の扉にも同じ文様が見て取れます。



写真：©山岸剛

# 市長応接室

創建時は、この市長応接室が市長室でした。この部屋は正面玄関の真上にあたり、部屋から通じるバルコニーが車寄せの天井部分になります。このバルコニーは近年ではハロウィンの時にかぼちゃのオブジェが飾られたりしていますが、昔は市長等が演説をする場所でもありました。



今と昔

ここでは、大理石の飾り暖炉が部屋の象徴として壁面の中心に置かれています。これは暖炉型のラジエーター・ボックスで、当時の格式の高い部屋は設備機器類がむき出しのままでは美観を損ねるため、このような飾り暖炉に納めたり、花台などに隠したりしたようです。この飾り暖炉は、放熱器のカモフラージュと接触防止のためのグリルが設置されていました。

飾り暖炉以外の市長応接室の内装はほとんどが改変されています。天井は貼られ、壁もシンプルな壁紙に貼りかえられ、床の相互矧フローリングブロックも貼りかえられた可能性があります。しかし、床の寄せ木ボーダーのフローリングブロックなどは、創建当時の意匠と同じとなっています。また、天井を撤去した後には竣工時の内装が残存しているかもしれません。

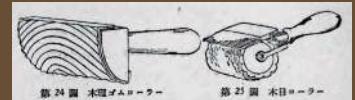


写真：©山岸剛氏

\*  ココが見どころ



写真：© 山岸剛氏



Digitized by srujanika@gmail.com



#### ○飾り暖炉のグリル

このグリルの図案には、川崎の産業を象徴するモチーフが使われています。

図案は筋雲と富士山を背景に、双発の飛行機二機が飛び、工場（建屋1棟、タンク5基、煙突3本）、鉄橋、汽船が配されています。下の方の海の波間に海鳥が2羽。汽船には煙突が3本あり煙をたなびかせています。また汽船の左奥には、湾岸の倉庫と思われる切妻の連棟と紡績工場らしき据屋根が並んでいます。

これら配されているモチーフのモデルとして  
 •鉄橋 … 六郷橋  
 •煙突 … 鉄道省東京汽力発電所の煙突  
 •タンク … 日清製粉鶴見工場のサイロ



六郷橋 鉄道省東京汽力発電所の日清製粉鶴見工場のサイロ  
煙突

暖炉は設備が改修され、新たに窓際に空調設備ができることにより、その必要性がなくなったため、グリルも外され飾り棚のように使われていました。

外されたグリルは、行方が分からなくなっていましたが、今回の本庁舎解体にあたり、探索の結果、別の部屋のパイプスペースの点検口から出てきました。

# 市長室

創建当時は、ここが市長応接室でした。市長室の内装はほとんどが改修されて、現市長応接室と風合いを揃えています。

唯一、創建当時のまま残されているのが天井の形状(梁下のハンチ)です。

今と昔

市長室は、壁紙は市長応接室と同じでシンプルなものに貼り替えられています。照明は室内を横断する大型のものに更新され、床は相互矧フローリングブロックがカーペット(下地はPタイル)に更新されています。

続きの部屋となっている、市長応接室と比較してみると、市長応接室が更新の際にも創建当時の意匠性を重視していたのに対して、この市長室は、部屋の明るさを重視した大型の照明とし、床はカーペットとし、執務室としての機能性を重視したと思われます。



写真：©山岸猛氏

※ ココが見どころ

#### ○梁下のハンチ

市長応接室は、創建当時の天井を隠蔽して柱形状などが見えなくなっていますが、ここでは柱を繋ぐ梁下のハンチが、そのまま残されています。



**【ハンチ】**  
柱につく梁の端部  
が他の部分より太  
い部分。

講堂

講堂は、創建当時は市議会議場でした。昭和36年に第2庁舎に新しい議場が完成するとその役割を終え、その後は講堂として利用されてきました。講堂は他の場所に比べると創建当時のままの内装材や部材が多く残っています。

今と昔

講堂の大きな改修は、天井です。創建当時は、円形のトップライトで議場の円形テーブルを照らしていましたが、現在は塞がれ新たな照明が取付されました。壁は、創建当初は腰板が木製の市松の模様(櫛斑入合板三枚矧)でした。

中央演台側

壁一面に作られた、講堂の特徴でもあるプロセニアム(舞台を額縁のように区切る構造物)の額縁は、市長応接室の飾り暖炉と同じ「黒大理石」で、創建当時ものです。また、その額縁の内側にある豎袖は、テラコッタで出来ていて、これも竣工時のものです。



写真：©山岸剛氏

傍聽席側

2階の傍聴席の手摺壁は木製となり、傍聴席後方の階段がある部分を区切ったので、窓が塞がれています。傍聴席手摺壁、下端見切縁、手摺笠木、通気口はテラゾーで、創建当初のものと思われます。



写真：© 山岸 剛氏

※ココが見どころ

プロセニアムの額縁は黒大理石で、これも創建当時のものです。

片蓋柱はテラコッタ製で、これも創建当時のものが残されています。



写真：◎山岸隆

# 特別会議室

この特別会議室は、創建当時は第一食堂でした。途中昭和41年頃には建築局が入っていたようですが、近年は特別会議室として使用されていました。

この特別会議室には、大きな会議テーブルが置かれており、市の定例局長会議など、さまざまな市の重要な会議が行われた場所でした。

## 今と昔

特別会議室の内装は、ほとんどが更新されています。

天井は新たに貼られ、照明は雰囲気のあるペンダントライトから、機能性重視の埋込シーリングに更新されています。

床、壁も貼り替えられ、露出だった配管などはきれいに処理されています。

また、収納型の大型のスクリーン、音響設備を付加し、さまざまな会議・会合に対応できる部屋となっていました。



写真：©山岸 勝氏

## ココが見どころ

創建当時、ここは第一食堂でしたが、地下1階に第二食堂がありました。

第一と第二の使い分けは定かではありませんが、第一食堂の整然とした感じに比べ、第二食堂は喫茶室のような明るい雰囲気が写真からも伝わってきます。

第一食堂があった2階には、市長室、市会議場、助役室などがあることから、来賓などを招いての食事会などがあったのでしょうか。



写真：©山岸 勝氏

# 入札室

入札室は、創建当初は道場でした。途中昭和41年頃には保険課審査係、年金課保険料係が入っていたようですが、解体時は入札室として使用されていました。

## 今と昔

入札室内装は、天井は当時の形状を残していますが、照明は新しいものに更新されています。壁、丸柱の杉材の仕上げは撤去されて白く塗装されています。

床の高さは、地下1階の他の部分よりも数十cm下げられていたが、用途の変更に伴い他の部分に合わせられました。設置されていた柔道畠は撤去されプラットは床となっています。

また、創建当時の写真を良く見ると、奥に道場らしく神棚が祀られているのがわかります。用途の変更で撤去されたものと思われます。



写真：©山岸 勝氏

## ココが見どころ

入札室の入口から一番奥の壁には、創建当時のスチールサッシが残されています。スチールサッシは、そのほとんどが昭和40年代に、アルミサッシに交換されました。唯一この入札室に当時のままのスチールサッシが残されていました。

この窓は、締付ハンドルとグレモン錠で開閉できるようになっています。このハンドルなどの金物は真鍮(黄銅)で出来ています。



写真：©山岸 勝氏

# 時計塔

時計塔は、創建当初より本庁舎の大きな特徴として、また川崎のシンボルとして親しまれてきました。

時代の流れの中で、戦時中は迷彩色に塗られ防空監視塔の役割を果たすなど、さまざまな役割を担ってきました。近年では午前8時から午後6時までの毎正時に、市民に時の合図を届けていました。

## 今と昔

時計塔は創建当初の写真と現在の写真を比べてみると、時計塔の高さが変わっているように見えます。時計塔の窓の数を比べてもその数が違う事が分かります。これは、本館と東館の最上階がそれぞれ増築され階数が増えた事で、時計塔のプロポーションが変わってしまったため、高さは変わっていませんが、長さが短くなっています。

また、当初は屋上から時計塔へ出入り可能な開口があった事が分かります。塔内部にも開口を塞いだ痕跡のようなものがあります。

本館から時計塔内部に通じる鉄骨階段は、創建当時のもので、リベット留や踏面のエンボス鋼板などが見られます。



写真：©山岸剛氏

## ※ココが見どころ

時計塔は、通常は一般の人を入れる場所ではありません。

ここでは特別に、職員によって撮り溜められた写真などで、内部の様子をご紹介します。

### 最上階のようす



時計塔  
屋上

### 最上階手前の階段付近



時計塔  
第4層

### 当時のままの階段



時計塔  
第3層

### 階段室入口付近



時計塔  
第2層

### 時計塔 第1層

# 新庁舎整備の概要①

## 川崎駅周辺のまちづくりや他の施策との連携

- 「川崎駅周辺総合整備計画」において、市役所本庁舎の敷地周辺は「シビックセンター核」と位置づけられており、同計画におけるまちづくりの考え方沿って、機能や空間の充実を図っていきます。
- 平成28(2016)年3月に行われた「川崎駅周辺総合整備計画」の改定において、本庁舎等の建替えについて盛り込まれており、まちづくりに寄与する新本庁舎となるよう、相互に連携を図っていきます。

## 回遊性の強化とにぎわいの創出

- 第2庁舎跡地は、川崎駅と「緑の拠点」である富士見公園地区との中間点になることから、「うるおいの核」となる広場を整備します。
- 京急通りと、その終点である市役所通りとの結節点に、情報発信や交流の場となる「にぎわいの核」を創出することで、旧東海道や駅周辺の商店街への回遊性を強化し、人の流れを創出することで、にぎわいの波及効果を生み出します。



## 敷地の空間構成

現在の本庁舎は、いったん解体した後、時計塔や玄関を含む一部について、位置を南側に移動させ、低層棟として復元します。

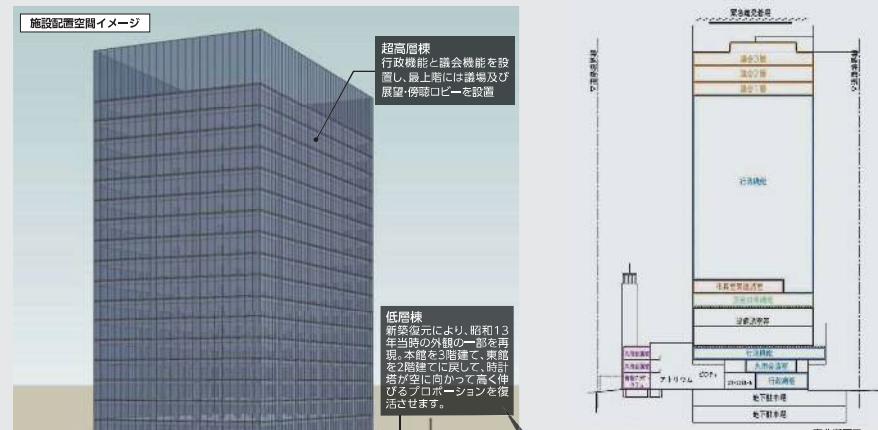
また、低層棟の北側に、行政機能や議会機能の入る超高层棟を建築し、低層棟とアトリウムで接続します。

第2庁舎の跡地は広場とし、市民が憩える空間を創出します。



# 新庁舎整備の概要②

## 施設配置空間イメージ



### 低層棟の新築復元について

低層棟は、創建当時の姿に復元します。当時は(昭和13年)本館が3階建て、東館が2階建てで、時計塔が空に向かって高く伸びるプロポーションでした。



### アトリウムのイメージ

